

ハクサイ これから出やすい病気

8月の農作業

軟腐病

症状

- 地面に接する葉柄と根頭部が侵され、葉柄では、その部分が水浸状となる。
- 外側の葉から水分が失われ、やがて衰えしぼみ、株全体が枯れて、たやすく引き抜けるようになる。
- はじめは水浸状の小さな斑点ができ、それがしだいに広がって、悪臭を放つようになる。
- 病気がすすむと、被害部分はとけてドロドロになる。
- キスジノミハムシなどの加害が多いと、傷口から病原細菌が侵入し、被害が多くなる。

発生条件

- 灌水や降雨にともなう土壌のはね上がりによって感染する。
- 土壌水分が多く、空気湿度も高い条件で発生しやすい。
- 結球期に温暖、多雨の年は発生が多くなる。
- 多肥栽培によりハクサイが軟弱に育つと発生しやすい。

対策・防除

- 灌水や降雨にともなう土壌のはね上がりによって感染するため、マルチ等で予防する。
- 地下水位が高い畑や排水不良畑では発生が多くなるので、高うね栽培にする。



尻腐病

症状

- ハクサイが15~20cm大に達したころから、地面に接した葉柄に、1.5~4cm大の楕円形または、ゆがんだ円形の淡黄褐色の病斑を生ずる。
- 幼苗のころから発生し、苗立ち枯れをおこすこともある。
- 病斑部は褐色に変わり、くさってへこむ。
- ひどいときは、被害の発生した葉は黄変して枯死し、しだいに内葉をくさらせる。
- くさっても悪臭を発生させることはない。
- 雨がちの気候のときは、病斑から上方の健全な部分に白粉を散布したように子実層を形成し、淡褐色に変わる。

発生条件

- 土壌伝染病で、病原菌は非常に多くの種類の作物や雑草に寄生して増殖し得るだけでなく、土壌中に混入した前作やほかの作物、雑草（有機物）を利用して増殖する。
- 菌核や厚膜菌糸の形で長期間（2~3年）土壌中で生存することもできる。
- ハクサイの茎葉が近づくと、病原菌はどのような状態からでもそれを侵して病斑を形成する。

対策・防除

- 多湿な土壌で被害が多く、被害ほ場では、ほ場の排水を良好にするとともに、石灰を使用し土壌酸度を適正にする。残さはほ場に放置しない。
- ハクサイ前作で被害が発生した場合は、残さを取り除き焼却する。
- 収穫期ちかくなって土壌水分が高いと発病がひどくなり、下葉に発生するので、マルチをして、下葉が土壌と直接接触しないようにする。
- 下葉に発病が見られたら、土壌と接触して発病した葉を取り除く。



裏面は雑草図鑑 エノキグサ・セイタカアワダチソウを掲載しています。

農作業のページは取りはずして別に保存し活用してください。

No.340 令和元年 8月15日発行

エノキグサ

種子で繁殖する夏生一年草。種子の休眠は比較的浅く、成熟直後の種子でも50%程度は発芽する。出芽は早春に始まり、秋まで続く。畑地、荒地、空き地などに生育し、樹園地などにも多い。一般の畑地に多発することは少ない。クワクサと似るが、エノキグサの葉はエノキ（榎）の葉に似て、3～5本の脈が明瞭であるのに対し、クワクサの葉はクワ（桑）に似てざらつき、葉脈は不明瞭である。

防除のポイント

防除剤で防除できるが、出芽深度が深いため、残草することがある。生育期中耕・培土の効果は高く、深く埋め込むのもよい。手取り除草も容易である。



エノキグサ



エノキグサ (生育初期)



エノキグサ (花)

セイタカアワダチソウ

種子と根茎で繁殖する多年草。種子に冠毛があり、風で飛散して新しい土地に侵入する。種子は10～25℃の明条件でよく発芽する。10月から11月にかけて開花結実し、降霜期に地上部は枯死するが、根茎から萌芽した幼植物はロゼット状で越冬する。越冬後、4月以降急速に伸長する。耕地内では種子で侵入しても繁殖に至ることは少ない。荒地、休耕地や耕地周辺のほか、空き地などに多く生育する。

防除のポイント

生育期に複数回、地上部を刈り払うと、草丈が抑制され、花期が遅れ、稔実率が低下する。休耕地では耕起を、畑地では中耕を行う。侵入初期であれば生育途中の茎を掘り上げ、地下部を回収する。遮光条件では発芽が抑制され、種子由来の幼植物は小さいため、作物の生育を良くし、通常の播種前、中間の管理をすれば繁殖に至らない。



セイタカアワダチソウ (開花期)



セイタカアワダチソウ (生育中期)



セイタカアワダチソウ (花)